第1部　各地域における東日本大震災
A　田老地域
第4章　田老地域の仮設での生活

神田より子

はじめに

ここでは田老のグリーンピア三陸みやこでの避難生活を経て、グリーンピア敷地内に建設された大規模な仮設住宅での避難生活、田老グリーンピア仮設商店街の成立とその後、田老の子供たちのための仮設保育所の取り組みについて取り上げた。

２０１１年６～７月頃になると仮設住宅の第１期分ができ始め、８月前には避難所にいた最後の人も入居できた。そのため７月いっぱいで避難所は閉鎖された。

田老総合事務所所長だった上屋敷正明さんによると、内陸に避難した人などには情報が届かなかったので苦情もあった。住居がわかっても個々に対応しきれなかった。個人情報についても話し合ったが、今回はそういう話では進められなかった。何か言われても私が引き受ける、何があっても情報を挙げてもらう方が大切だと思ったという。

写真１　グリーンピア　テニスコート仮設

１　仮設住宅に移って以降

田老のグリーンピア施設内の仮設住宅は以下のような構成になっている。駐車場仮設は37世帯、グランド仮設は２４８世帯、テニスコート仮設は１２２世帯ある。

以下は赤沼正清さんから伺った話である。駐車場仮設には主に大平地区自治会、テニスコート（ここは元テニスコートで12面あった）仮設には乙部、青砂里、下荒谷、荒谷（ありや）など12の自治会の人々が入居していた。グラウンド仮設には小林から中荒谷地区の世帯に入居してもらった。

仮設入居に関して、一人暮らしは１部屋、４人世帯までは２ＤＫ、それ以上や家族の状況によって３ＤＫとした。仮設の場所を選ぶ際に、田老では抽選ではなく、コミュニティを対象にした。宮古勤務の人は西ヶ丘や、ドラ方面に行きたいと希望した人もいた。乙部自治会の人もあちこちの仮設に入った。団地ができてくるとそこへ移動する人も出てくる。

グリーンピアの仮設住宅には、社協のコミュニティーセンターや各区域に集会所が開設された。男性の居住者の方々のために休憩所（父ちゃんハウス）もできている。ここは漁協組合の人達が集まる談笑の場になっている。各仮設には仮設掲示板があり、その都度次のような催し物の張り紙が出されている。

「常運寺のお知らせ、８月14、15、16日盂蘭盆会供養
１座８時30分、２座９時30分、３座10持30分、４座11時30分」

また各仮設脇には倉庫が設置され、希望者はこれを利用している。

仮設住宅での活動

色々な地域から田老のグリーンピア仮設に来た人がいるので、他所から来た人が仮設内に閉じこもらないように、会を作ったりしている。例えば、「シルバーテニスの会」では、岩泉町の方に指導してもらいながらクラフトテープで色々作ったりして交流している。

「ゆいとりの会」は裁縫のできる人が集会所に集まって活動をしていたが、さらに広く交流が広まり、たろちゃんハウスの共同組合に出資金を出し、一組合員となり出店している。

駐車場仮設の集会所の生活支援員をしている**林元睦美さん**に

２０１２年８月11日にお話を伺った。

宮古市社協の臨時職員として生活支援員をしており、ここの仮説に住んでいて、広さは４畳半が２部屋で、両親との３人暮らしをしている。震災で家と小売り店での仕事を失ったため、緊急雇用でこの仕事に応募した。昨年12月から６か月の限定で、今年４月からまた1年やる。履歴書を出して新規に雇われるか決まる。月給は11万９千円で、社会保険等は引かれる。勤務時間は８時15分から５時15分までとなっている。

集会所での仕事は、福祉センターのセンター長や相談員からの指示でやっている。絵画教室、お茶会などに声かけをして集まってもらう。ボランティアと一緒にやる。企画したことは全戸にチラシを配るが、その都度声かけをした方が来てくれる。戸別訪問はできない。相談員はセンターに２人しかいないが、サポートセンターではお茶のみができるし、マッサージや血圧を測りながらゆく人が多い。

仮設に入った人々の生活

以下は再び赤沼正清さんの話である。若い人は宮古に家を建てて出ていったが、年寄りは皆と一緒が良いと、１人で残っている人もいる。田老の中心地の中町にいたKさんは、盛岡の娘の所に行ったが、知り合いがいないので戻ってきて、６月中旬に仮設に入った。籠作りのグループにも入っており、このグループには８地区の人がいる。

災害援助物資は新里に集められ、各地域に分配された。仮設は平成26年６月で３年になるが、ギシギシしてきた。冬は結露ができる。トイレも凍ると全戸で水が出なくなるので、風呂水を溜めて水を流すなどした。仮設の保守管理は対応が遅いので、個別に会社と契約してやっている。仮設はテニスコートとグランドでは業者が違うので、建て方もトイレなども違う。田老では下水処理が終わっていなかったので、仮設ではじめて水洗トイレを使った人もいる。

震災後の緊急雇用で、社協が生活支援員を派遣した。平成26年４月からは市の単独で配置した。３年目から地域のコミュニティ再建のためというのが主な目的だった。田老では相談員も被災者だ。社協では支援員の人たちに介護福祉士、ホームヘルパーなどの研修を行い、助成金がなくなっても、働ける場を確保できるように援助をしている。平成26年４月から生活困窮者の自立支援を手がけている。

テニスコート仮設ではこの間に死んだ人が２人いる。夫婦で見なし仮設に住んでいた人が宮古に戻り、別々の仮設に入ったが、テニスコートに入った人は自殺した。震災関連死とされた。震災後に亡くなった人は直接葬儀場に行き、一晩そこに安置して、そこから火葬場に行き、午後に葬式を出す。仮設の人は１日か２日安置して火葬をするが、個別の住宅では４、５日は安置しておく。香典も被災者から受け取らないという人が増えた。自分が亡くなって香典を受け取ると、子供たちが返さなくてはならないので受け取らないという。亡くなった後、墓の面倒を子供たちに見させられないと、無縁仏として寺に骨を置いてもらう人もいる。先祖代々のつながりも途切れてゆく。

仮設の自治会

自治会は震災後、被災を受けた地区は解散した。残ったのは、田中、田の沢、神田など山手側だけだ。上荒屋、中荒谷、乙部１、乙部２はなくなった。被災者が仮設に別々に入ったので、会有財産も使えなくなり、整理して解散した。震災後、集会施設ができた５月15日以降にはじまり、それから３か月くらいですべて解散した。活動資料もなくなった所は、復活してもらった。納税貯蓄組合や、漁協組合金庫などにあった貯金も引き出した。

グリーンピア仮設の内、大平地区の人たちはほぼ駐車場脇の大平仮設に住んでいる。37世帯あり、２０１１年の７月に自治会が立ち上がった。その頃はグランド仮設、テニスコート仮設などは自治会を結成していなかった。その当事、宮古市生活課と社会福祉協議会が説明会に来て、大平地区はいち早く立ち上げた。会長は林本卓男さんで、かつては宮古市商工会議所の支店長をやっていた。現在は田老町地域協議会の会長と、任意団体の街作り協議会の事務局長をしている。

大平仮設は37世帯なので早くできた。グラウンド仮設は２４８世帯あるので、４つの行政区に分けた。テニスコート仮設は１２２世帯で、２行政区に分けたが、自治会は１つ。グリンーピア仮設全体では12自治会から人が入っている。宮古市からの人もいる。そのため普段見慣れていない人もいるから様子を見ていた。

テニスコート仮設は平成25年11月４日に残された人の自治会が結成された。25戸出たので、１０１世帯になった。このときは世帯分離した家があり、民生委員、行政連絡員の推薦があり、代表の名前が必要だったので、事務局や副会長を２地区からそれぞれ５人ずつ出てもらい、準備会を２回開いた。市の助成金は定額が３万円で、１世帯３００円の助成を受けて、８万５千円の予算で活動を始めた。年会費は１００円にしたが、平成25年度は徴収せず、助成金だけでやっている。自治会活動には保険をかけた。

仮設での活動

ふれあいサロンのような地区内交流の費用は、共同募金に申請すれば助成金が出る。平成25年にはこの助成金を使って地元の住民と仮設の人の交流会を開いた。被災しなかった人たちと被災者の間で壁ができたため、社協が仲立ちをして、修復した。

いろいろな地域から田老のグリーンピア仮設に来た人がいるので、他所から来た人がそこで閉じこもらないように、自発的な会を作った。例えば「籠を作る会」では田老から嫁に行った岩泉の人が指導をしている。また「結い取りの会」は裁縫のできる人が集会所に集まっていた。交流が広まり、販売するには集会所ではまずいというので、たろちゃんハウスの協同組合に出資金を出して、一組合員になって出店した。仮設商店街とサポートセンターの基礎はコンクリート製で強度は強いが、それ以外は杭のみで弱い。

老人クラブは乙部１と２が乙部老人クラブとして一緒に活動しており、私はここの会長もやっている。昔は自治会も乙部青砂里地区として一緒で、事務局長と会計もやっていた。　私は役場に入るときに「地域のためにがんばるぞ」と思ったのだ。

２　田老仮設商店街（通称：田老たろちゃんハウス）

グリーンピア専務取締役の上屋敷正明さんは共同店舗の立ち上げ、仮設住宅ができるまでの責任者、総合事務の統括者などをつとめた。

田老のたろちゃん協同組合

理事長の**箱石英夫さん**（昭和28年生）に２０１３年５月２日に話を伺った。

津波前は任意団体の田老スタンプ会の代表をしていた。会員は39名で、このうち津波で店舗を全壊したのは37名にのぼり、犠牲者も出た。津波後に店作りについて考えていたときに、宮古商工会議所から仮設住宅が１か所にまとまってできることになった。被災住民が買い物にも困るから、仮設店舗を出したらどうか、という提案があった。自分たちで何かできないか話し合っていたところだったので、会員だけではなく会員外にも声をかけた。

２０１１年４月７日に第１回の話し合いがあった。商工会議所から、中小機構からの援助で、仮設の店舗建設が可能と言われた。建設に半年かかるので、その間にテント営業も可能だという。そこで10メートル×10メートルのテント２張りを県に建ててもらい、テーブルによる営業を考えた。

仮設住宅の建設も始まり、最初の入居は５月５日と決まったので、その日に合わせて営業を開始することとした。それ以前はアリーナでの避難生活だったが、仮設住宅は自活が前提なので、移ってすぐに買

写真２　たろちゃんハウス

い物ができるようにした。

建物の申請やトイレの設置、建物の管理、そして制度を利用するために組合にすることなど、毎週木曜日に勉強会を始めた。許認可の問題、保健所、税務署の問題など解決すべき事が山ほどあった。宮古商工会議所から広田司朗専務が、県の決裁ができる振興局長、市や県の関係者を連れて来てくれた。その顔ぶれを見て、いろいろな人がバックサポートしてくれることがわかり勇気がわいた。

その間に県でテントも準備してくれた。商工会議所なども後押ししてくれた。普通に許認可を取る依頼をすると時間がかかるが、当時は非常事態ということで特別に対応してくれたのだと思う。

心配事は、客が来てくれるか、仕入れは可能かなどだった。私は山崎パンのチェーン店をやっているが、パンのトラックが配送に来てくれるか心配だった。仕入れも物がなく不安だった。ビール工場も山崎パンの工場も被災していたので、全国の工場から集めて配達していたようだ。

こうして7月30日に設立総会を開き、全員賛成で決まった。9月25日にはオープニングセレモニーを行い、22店舗が開業した。その間、1週間ほどセールが続き、イベントなどを行った。スタンプ会員以外では6店舗入った。善助屋も会員になった。

テント開店の際は魚、野菜、アルコール類は喜んで買ってくれた。魚は宮古市場が少し動いていたが、刺身は遠くから来た。

中小機構というのは国の組織で、仮設店舗の建設資金を出してくれた。仮設店舗は1年間は無償で貸し出し、1年後に市に譲渡をするという形式で使うシステムだ。1年過ぎたので、今は市から借りている形式をとり、4年間は使えるし、賃料はない。本建設までの延長は可能という。

今は売り上げが伸びるかが心配で、増えないと維持できない。仮設の人口が減ると困る。街作りの遅さにしびれを切らし、地区外に引っ越し、または中古物件を買って出てゆく人もいる。

津波前の田老は平成23年1月1日現在で1千593世帯、人口は4千342人だった。24年1月1日には1千449世帯、3千901人。25年1月1日で1千418世帯、3千669人となった。

これは住民票統計なので、実感とは違う。店舗としては配達、移動販売などを展開している。売り上げは震災前の6、7割で、店舗ごとに違う。被災していない人々のために、個人で旧市街地にプレハブの仮設店舗を出したり、配達をしている業者もいる。

今後街づくりにどうかかわるのか、商売を根本的に見直す必要がある。これまでは店舗兼住宅でやってきたが、これからは高台移転で店舗兼住宅とするのか、または嵩上げした土地で店舗兼住宅とするのか、あるいは高台に住み、店舗は嵩上げ地とするのかなどである。考えは別々でも、一致しているのは個々の店舗ではなく、商店街としてやりたいということだが、廃業を考えている人もいる。

これらは市の都市計画の問題なので、今後は要望をどう出すかが課題となる。国道沿いだから、嵩上げ地での再開の要望が多い。しかし理美容業など業種によっては悩んでいる。

広場があるとイベントができて集客が見込めるので、相乗効果が得られる。ポイントを復活し、寄附などを利用して、機械を買い、復活したい。

今の仮設店舗での現実問題としては、トイレがB棟のみなので、2階や他の棟にも設置したいという要望がある。とくに冬場が問題だ。テント営業の頃はバリアフリーのように入りやすかった。この仮設建設の際もお願いしたが、B棟だけがバリアフリーになった。そのためそれ以外は自前で行った。入り口は各棟に2か所あるので、それぞれに付けることにした。

組合賦課金は1階は高く、2階は安くした。テント営業は17店舗で、こうした方々を優先し、その後店舗に入りたいという希望者には2階に入ってもらった。看板は途中から計画し、市や県に要望した。買い物などをして応援したいのに場所がわからないという声もあったが、看板が設置されたのは今年の3月だった。

昨年10月から緊急援助雇用で職員を置いた。本設は各店舗での聞き

取りが必要で、勉強会はしている。

土地区画についても聞き取りが必要だ。月に1回の割で本設に向けての意見交換はしている。時間がかかりすぎると、本設までに次の仮設が必要という声もある。私は仮設に6人家族で住んでいたが、3世代同居という事もあって家を建てた。仮設は3K、2K、1Kのサイズで、高齢者や子供の問題で引っ越す人が多い。

組合は仮設店舗の維持運営のためのものだったが、街作りにいかに関わってゆくのかを検討することも必要だと思う。4つのパターンの中でどうするのかを考えるべきだ。街作りが早く進むように、昨年冬に意向調査を行ってきた。半数以上が地区外移転を希望していて、ショックだった。それまで店舗を存続できるか頭痛の種になっている。

「ゆいとり」の前の寿屋は崎山に出て、ここで営業を再開している。崎山地区には59戸建設予定だという。宮古病院に近いから決めたという人もいる。田老地区には宅地造成された土地が少ない。海に近いところが良いという。乙部高台も良い場所だが、造成はされていない。

たろちゃんハウスはテレビ、新聞に出ることが何度かあり、人が来てくれる。11月に1店舗空きがあって、そんな折にゆいとりから話があった。「ゆいとり」は仮設の集会所でやっていたが、物作りに場所を使うので、ここなら事業主としてできるということで、理事会でも機関決定をして、入居してもらうことにした。

たろちゃん仮設共同店舗の今後

たろちゃんハウスの事務職員をしている**鳥居茂さん**（昭和29年生）から、2015年2月10日、12月25日にたろちゃんハウスのこれまでと今後について話を伺った。

2012年10月からたろちゃん協同組合の事務として働いた。たろちゃんハウスでは22店舗営業しているが、震災当時に商売をやれる人たちが組合を作って始めたので、入れ替わりはない。これから街が復興していくのに合わせて、グリーンピア三陸宮古敷地内のこの仮設店舗から出て行くことになる。ただ、街に出て行くにも人があまり住んでいないので、そのタイミングが難しい。人口が減っているので、これからは厳しいと思う。街の中心がなくなって、分散するのも商売を難しくする要因だと思う。高台と中学校前と総合事務所前に約30店舗が分かれる。住宅は高台だが、店舗は国道沿いの嵩上げ地が多い。やはり人口が少ないというのは厳しい。

店舗の再建の見通しはまだ立ってない。グループ補助金が使えないかということを考えている。グループ補助金に関してはたろちゃんハウスの店舗のみではなく、たろちゃんハウスに入っていない店舗も対象になるので、商工会議所に指導をお願いしている。

組合の仕事としては仮設店舗の維持管理や共同販促などだ。仮設店舗から少しづつ出て行くことになり、維持していくのが大変だ。建物は中小機構から宮古市に譲渡され、組合が無償で借りている。維持管理経費は変わらないので、人数が少なくなればなるほど残っている店舗の負担が大きくなる。個々のタイミングで出て行くことになるが、来年が勝負だと思う。国道筋は住む人が少ないので、どうなるか不安だ。

扱ってる商品は、地元の人たち向けの食料品、日常品雑貨、理美容が中心で、観光客向けのものは少ない。利益を上げられないところでは商売できないので、苦しいところだ。後継者がいない場合は、自分たちの代で終わりにするということを考えている人も少なくない。震災前に商売していた人が、震災を機にやめた人も多い。田老地区のポイントカードがあって、30店舗ぐらい参加していたが、そのなかで被災しなかったのは2店舗だけだった。

各店舗が再建して、たろちゃんハウスを出て行っても、組合は存続し、組合に参加していない店舗にも呼びかけて、一緒に活動していきたいが、どういう形になるかはわからない。今は自分の店を再建することで精一杯なので、新たな商店街について考える余裕はないと思う。商店が分散し、1か所で買い物ができるということにはならないので厳しい。高台からは車で買いに来ることになるので、車に乗ったら宮古にそのまま行ってしまうのではないかという心配もある。

（2015年12月25日に再度伺った。）

組合事務員の仕事は27年度いっぱいで終わる予定だ。今の店舗数は18で、田老から出て営業している人は1人だ。廃業した人は1人で、体調を崩したために5月末で店を閉めた。それ以外は田老で商店を継続しようと考えている人たちだ。昨年9月に田老地区の30店舗で中小企業庁の「グループ補助金」に申請した。田老地区の商業者は一緒にやろうと話がまとまり、皆で申請した。これが認められたので、それぞれ事業に着手したところだ。現在設計中の人、建設中の人など準備段階は様々だ。補助率は認められた事業費の4分の3だ。残りの4分の1は自己負担となる。被災前の店舗を復旧する費用が対象で、それ以上の額は出ない。店舗兼住宅を希望する者は、店舗分のみが補助の対象となり、住宅分は自前となる。住宅の場合は国、県、市から合わせて500万円の補助がある。

嵩上げ整備されたところは、それぞれ新たな土地が割り当てられ、その土地に店舗を建てることになる。漁協近くに新しくできる道の駅付近には3、4店舗予定され、他は高台、嵩上げ地の割り当てられた土地に建てる予定だ。漁協の前当たりにイベント広場と駐車場ができる計画とのことだ。津波が恐いので住宅は高台、店舗は嵩上げ地にと言う人が多い。高台には消防署、診療所、保育所が建設される予定だ。

ここの仮設は来年度いっぱいくらいで閉鎖したいと考えている。ここでやめる人が出てくるかもしれない。町に移っても客が来てくれるか心配だ。新しくできる三陸道は山側を走る計画なので、交通量が減って商売が成り立つのか、心配の種はつきない。

田中和七さん（昭和29年生　中町→グリーンピア仮設住宅）2014年4月22日に組合事務所で話を伺った。

中町に家があった。大正12年に祖父が菓子屋を始めて、私で3代目。昭和8年に被災したが、昭和9年7月に再建した。昭和8年の津波では祖母と叔母を亡くした。祖父は再婚して父の兄弟が4人増えた。家族だけで11人いた。職人も雇っていたので、当時としては大所帯だった。

店舗の再開

2012年3月12日に再開した。11日はどうしても無理だった。店だけは元の場所の近くに建てて、住居は乙部の高台のどこかになる。

中町の自治会はみなさんバラバラになったために解散になった。ヤサラに近いことはやった。預り金というか共有財産があったので、それを使ってお別れ会のようなことを2年目の暮れにやった。グラウンド仮設は今まで別地区だった人たちが集まっている大所帯のところなので、自治会は発足していない。大雪が降って、やはりみんながあったほうがいいとは思っているだろうけど、言い出しっぺがやらなくてはいけなくなるので、なかなかできない。どこもそうだと思うけど。だけど、例えばバラバラで雪かきをすることが如何に効率が悪いかということを知っているから、どこからとなく共同でやることもある。高齢者の家の前は近くの若い人がやっていた。

まちづくり協議会は、仮設を出た時のことや、商店の再建に向けての話し合いをしている。土地のことや、金融関係からの借り入れや、グループ補助金、宮古市の支援制度などを使っての再建の話をしている。人口が減少しているから、どれぐらい持続できるかわからない。

まちづくり協議会は、地元の人の意見をまとめて行政やURに伝える役割がある。情報がないし、どうしても専門的な力を借りなければいけないので、誘導されているのではないかという懸念を持っている人もいる。やはり、引いて見ている人もいる。URも企業だし。まちづくり協議会や部会では、30代ぐらいの若い人たちがその場に来ないのが心配だ。これから30年後をある程度見据えた人たちがまちづくりに参加してくれたほうがいい。俺らはあと20年もないからね。消防にも参加してほしいし。街に対する思いみたいなものは、みんな持っていると思うし、仕事もあるし、そういう場に慣れていないと出られないと思う。出ると何か責任を押し付けられると思われんじゃないかとか。

嵩上げも0～3メートルだったのが、0～1メートルになったり、限りなく0になった。だったら早く家を立てるようにできればいいのにと、今は思っている。時間はみんなのやる気を削ぎ落としてしまう。気持ちがみん

な折れている。3年経つと。最初のころの勢いは怒りもあったし、それをエネルギーに変えていた。怒りの捌け口そのものも見失ったり、気力そのものが削がれていると思う。特に今は沈滞期だと思う。これまでの情報は全部出し尽くしている。あとは自分の面積や場所を知りたいのに、それが提示されていないので、その先に進めない。補助金を申請するにしても、面積すら決まらないと計画すら立てられない。自分はお菓子を作っていて、工場と店舗と住居で住所を3つも持っているので、なんか地に足が付いてない。気持ちも落ち着かない。みんなもそうだと思う。商店主の人たちを最後まで見なくてはいけない役にもついているので、仮設にいたほうが便利。

今後、たろちゃんハウスのような共同店舗を考えていきたい。だけど共同店舗の中の店が減ると、その他の店舗でそれを補わないといけないので、現在は自立型店舗で集まって建てる、自立再建集客型というのを考えている。総合事務所と中学校前と高台の3つの案が出ている。もとの田老の街で罹災証明書をとれる人たちは、1つの組織として見ようという計画を立てている。流されなかった人たちから「早く帰ってきてね」と言われると嬉しいが、どっか入れる土地を見つけてほしいとも思う。ただ3年も経つとグリーンピアが中心になってきているから、自分たちは捨てられたような、溝というか壁を感じる。グリーンピアに買いに来ないですもの。いろんなイベントで芸能人とかが来ると、来るけど、それも遠慮がちになる人も結構いる。だから、最初にやらなくてはいけないことは、そういった壁を取り除くことだと思っている。今、グリーンピアで商いをしている人たちが、トラックでもなんでもいいから、下のほうに来て、元の街の人たちに買い物してもらうイベントを計画中。グリーンピアにいてもやはり壁を感じているし、お互い感じていると思う。個々で見ていくと付き合いは深いけど、全体でみるとそういうのがある。歩み寄るというか、共通のお祭りとかあるときは、違和感なく話せるけど、5月のお祭りもないからなかなか難しい。お祭りのときにお魚の天ぷら揚げる習慣があって、今は何個か注文がある。昔なら店に買いに来たんだけど、店はグリーンピアだから配達というのも、おかしくはないけど、そういう時代なのかなと思う。油代にもならないけど、そういう人たちに助けられてきたから、これからも大切にしないといけない。少なくても、あと2年でグリーンピアを出るので、自然発生的に新たな付き合いができるようになっている。安住の地がないと、寛容になれない人が増えている。言葉が気に食わないとか。だから、私は上の町とか下の町とか言わないですよ。元の町って言わないと。上っていうとグリーンピアのことを言っているし、自分達自身も下って言っているのに、「自分達のことを下って言った」とかいう。些細なことだけどそういう声が聞こえてくる。些細なことなんだけど。

昭和8年の津波

昭和8年に、防潮堤を青砂里まで直線で作る計画があった。だけど水門を作る技術がなかったから、への字型になった。だから、青砂里に住んでいる人たちは「田老の人たちは自分たちを見捨てたんだ」って、消防団とかやめた人もいた。そんな時代があったけど、そういう変な壁は時間が解決してくれる。野原はもろこしやキビ畑とかがあって、湧き水もあって大雨が降るとすぐに水溜りで洪水になった。三鉄が通ったときに、そこで出た石捨場になって、わかめとか昆布を干すのにちょうどよい場所になった。そのうちに浜小屋ができて、そこに住むようになって、住宅ができて、1軒が2軒、2軒が6軒のように増えていった。坪単価が3千円から、坪1万円になった。そのうちに整地して住宅用に売ったりしていた。震災前は坪5万円だった。昭和40年代半ばぐらいの話だ。昭和8年のときは津波が来なかった沢沿いにあった青砂里とか、乙部の山際の人たちは、井戸水を汲んで生活していたようだ。そうした人たちが、水道も通る野原地区に降りてきた。結果的には3軒ぐらいを残してみんな下がってきた。下がってきたら今度の津波がきた。街の分家の人たちも入ってきた。浜をやっている人たちは重い船を上まで持ってきてというよりは、浜の近くに住むほうが楽。浜小屋といっても、仮眠室も応接室もあったりして、普通の家よりも良い

ところもあった。

津田写真館　津田重雄さん（昭和15年生）２０１２年８月15日に話を伺った。

昭和８年３月３日と、前の年、１年後の津波のガラス乾板の写真が13枚残っている。元の店は役場の近くで、善助屋の斜め向かいだった。この写真は先代の津田重一郎（今年で25回忌になる。60歳くらいで亡くなった）が撮った。

営業店舗は田老町内を転々とした。津波当時の店は館が森にあった。津波の時は車に乗っており、野球場あたりを走っていたら、ドンときたので、車が壊れたのかと思った。知人が電柱が倒れると教えてくれたが、家まで帰れた。

ラジオで最初は30チン、次に3メートルと言ったが、電気がパチンと切れたので、「これはだめだ、逃げっぺし」と言い、車で逃げた。犬が老衰で動けないので、それを抱えて、家内と逃げた。道の駅まで行ったので、津波は見ていない。東京の娘たちはテレビを見て、「お父さんは死んだ。お父さんは哀れだ」と泣いたという。道の駅で見たテレビには地元のことはなかなか出てこない。ここには情報センターがあり、いろいろ見られたが、電話がつながらなかった。水沢まで行けば携帯がつながるので、グリーンピアに来てから2～3日後に娘たちと連絡が取れた。グリーンピアでは15日の夕方に電気がつながった。

金庫は見つからないと思ったが、警察に届け、鍵の番号なども言っておいた。自衛隊ががれきを片付けて見つけてくれた。金庫は山盛りになって、警察の仮設においてあった。警察は金庫を壊して、すべての中身を確認する。少し水が入ったようで、湿っていた。

鳥獣保護員と交通指導員をやっている。交通指導員は来年で45年になる。昭和43年に施行されてからずっとやっている。行政からの依頼で、千人に1人の割合で選ばれる。田老の人口は当時鉱山も含めると8千人だった。今は宮古市の隊長で、隊員は28人いる。年に１２０日朝街頭に出る。８月は1日から10日、17日からは金、土と出る。ほぼボランティアで、権限はないので、あくまでお願いをするレベルだ。

3　田老仮設保育所

田老の仮設保育所で所長をされている**満山明美さん**（昭和29年生）から、２０１２年８月20日に話を伺った。

保育所には45人いる。ここの仮設保育所に来てからは40人台が続いている。津波前は73人で、いつも70人以上いた。職員も津波前は14人いたが、今は保育士は5人で、給食係が2名と私の8人でやっている。2日前にも地震があったが、このときは迎えが早かったので、次の避難場所への移動をしたのは半分くらいの子供たちだった。

震災当日

3月11日は年長児を除いて午睡中だった。年長児は卒園間近なので午睡はしていなかったため、手をかけずに済んだ。小さい子を泣かせないように着替えをさせ、3歳児までは手をかけて、防寒具をつけさせた。年長児は防寒着を着せて外に出た。着替えに時間をかけすぎたという思いはある。

いつも練習の時は歩道橋が生きていればそこを渡ってゆくと決めていたので、そこから第3避難場所の公民館へ行った。中へ入っても大丈夫と言われたが、揺れてガラスが割れると困るので、外にいたが、津波が来たので山の方へ走って逃げて、ぎりぎりだった。歩けない子は負ぶい、または誘導車に乗せた。

逃げることに関しては、毎月1日を安全の日として、子供には「津波の練習の日」として、練習をさせていた。その際には少しずつ走らせていた。それの仕上げが3月だったので、「津波」「逃げる」という言葉に子供たちは慣れていた。誘導車には3、4人乗せた。支援児は走れないので、同乗させた。国道を渡る必要があったが、消防分団の人が誘導してくれたので、一気に渡れた。練習では急ぎ足で4、5分だったので、それくらいで行けたと思う。地震のあと、物が落ちないか確認し、着替えさせるまで10分くらいかかったと思う。逃げ口の確保もした。

この揺れでは逃げなくてはと思った。前々所長からの引き継ぎで、ここは津波の地域と言われていたので、毎月1回練習をしていた。職員が必死なのを見て、泣く子もなく皆ついてきた。保護者が来れば確認をして返したが、そのために被災した子が2名いた。早くに帰った子たちがいたので、全員だったら山の斜面を駈けきることはできなかった。自分で走れる子が多かったのはラッキーだった。練習していた第2避難場所の裏山までの距離は200㍍だが、自分で走ろうと言って、大きい子には先頭に立ってもらい、職員1名が先頭について、1人が着けば、次の子に手をかけるというやり方をした。

以前から勉強会をして、課題を出して次々とやっていた。田老に来て5年目、所長になって1年目だった。引き継いできたことは身についていた。その前にいた町中保育所では、津波の練習はやっていなかった。市内から来た人は、「安全の日」を知らないので、総合事務所からのアドバイスや、訓練をして、自分たちで勉強もしてきた。

第2避難所に行ったら、孤立するとずっと思っていたが、地域の人もいるから大丈夫と言われた。練習はここでやるが、年に1回は公民館まで行く練習をした。国道を渡るのは大変という思いはあったが、それも考えて練習をした。

2日前の地震の時に練習だから行こうと、公民館まで行き、休ませてもらえた。また人もいたのが安心材料となった。

避難用リュックの中に何を入れるか決め、それらを入れて誰が持っても良いようにしていた。当日はそれを外に出し、その後子供たちに手をかけた。おむつ、タオル、毛布などを持って逃げたので、これはよかった。練習だけは継続するというのが、ここの保育所の伝えだった。

駆け上った山の上の墓地に待機した。足下に水が渦を巻いていたのは見ていた。子供たちをできるだけ山の上に上げて、斜面の一番上まで上げた。人の邪魔にならないように、空いている場所にビニールシートを敷いた。毛布1枚では足りず、常運寺からタオルケットをもらい暖を取った。誘導車が流れてしまい、常運寺からもらったサラシを負ぶい紐にできた。寺に迎えに来た保護者の靴が濡れていたので、寺でもらった足袋で助かった。翌日近隣の山が火事になり、サラシを裂いて子供たちが煙を吸わないようにさせた。11日の夜は30人いたが、その日は返さず、保護者3世帯も一緒にいた。

翌日は火事のため、避難所となった北高へ移動するよう指示があり、4、5人残った子を連れて1泊した。2泊後に職員が解散した。幸い避難した児童はすべて無事に家族に渡すことができた。被害は7名の家が全壊、1名が半壊、1名が父と姉を亡くした。

保育所の再開

保育所は3月28日に再開した。北高へ行く途中の近隣児童館での再開だった。卒園児を送り出したいという思いがあり、前の1週間はその準備と父兄への連絡をした。卒園児の1人が亡くなったが、母が代理で式に出席した。家が流れた子もいたので、思い出を作るため、同級の子から写真をかき集めてパソコンで作って記念に持たせた。いつものように大福餅を持たせたいと思い、日数のない中手配もできた。私服で良いからと皆を集め、お祝いをして卒園させた。

正職員4名が避難所の手伝いをする。在園児のいる北高では12時間交替で寄り添い、引き継ぎをしながら手伝いをした。

再開にあたり、公民館の電気釜を借り、野菜などを分けてもらい、御飯と味噌汁の給食をここで出すことができた。初日は大勢来たが、次の日は数名だけだった。瓦礫の中を通らないと児童館まで来られないので、子どもがいやだという。そこで検討後、ホテルの240畳ある大広間の半分を区切って使わせてもらい、遊ぶのも食事もすべてここでできた。大広間に来てからは36~7人が戻った。

仮設保育所

9月15~6日に仮設保育所ができて、20日頃から再開した。これ以降は保育の面では問題はない。しかし子供たちには夜泣きなどが見られた。避難所では親と一緒にいたり、地域の人に遊んでもらえて、保育所に来ない子もいた。家族が亡くなり、子どもを離せない親もいたが、

訪問して寄り添った。親の様子は送り迎えの際に声かけをして、表情などを確認することで把握した。

今は保育士が減って大変な状態が続いている。また支援の人たちが多く来るので、それへの対応に時間がかかる。支援を受け入れなければという思いと、子供たちの元気な姿も地域の人たちに見せたいとの思いで、何も無いという日はない。

支援児とゼロ歳児の部分での職員が足りず、今はいっぱいいっぱいで、超過勤務でどうにかやっている。待遇改善をしないと保育士が来ない。園児の数が減ったので、職員の数を減らされることは、ケアが難しい。前は年齢別の保育をしていたが、今はそれができないでいる。でも一緒の保育で、年長の子が年少の子の面倒を見ているので、それも少子化の時代には良いかなと思う。保育士1人がトイレなどに出ても皆で見られる。日によって年齢別にしたり、一緒にしたりして、保育士がそれぞれの子の動きを見ている。支援児は1施設おおむね4人。ゼロ歳児は希望があるが、地域では入れない子もいるので、職員の数が足りないので増やせない。今は無理なくやっているが希望はある。

今は職員不足のため、掃除など大変なので、給食担当者にも手伝ってもらっている。3~5年はここにいることになると思う。仮設の人たちの居場所が決まってから保育所も検討することになると思うが、見通しはまだない。「保育園の歌」は楽譜が流れてしまったが、キチンと次に伝えたい。

4　田老郵便局

山根登さん（田老郵便局局長、平成17年から勤務）に2013年3月28日にお話を伺った。

行動の起点は奥尻の経験にあり、長い地震は津波が来ることが頭にある。妻の実家は田老なので、逃げる場所はここと言うことは思っていた。

3月11日とそれ以降

当日大きな地震は3回あった。1回目の長い揺れで津波が来ると思っていた。社員は3人いた。建物が老朽化していたので外に避難した。揺れが収まったので、中に入って片付けているときに再び揺れた。停電で通信手段がなく、自分の目と耳で確認し、行動した。3人一緒に行動しようとここにいた。避難者が徐々にやって来て、ゆっくりと人が増えていった。最初の地震の時は郵便局の後ろ側に避難したが、2回目には局の正面に出て、逃げてきた人が足早になってきたのを感じた。自動ドアも動かなくなった。お客様が局内で犠牲になってはいけないとギリギリまで待った。高台に避難した人が騒いでいたので、外に出た。騒いでいる声で津波が来るのがわかり、寺へ走って逃げた。女性の契約社員が保育所にいる子供が心配だというので、迷ったが迎えに行かせた。しかし途中で津波が来て保育所まで行けなかった。本人は逃げられたか心配だったが、9時頃無事を確認できた。小学校、寺、ここを行ったり来たりした。

津波が来て、街が壊れるのを見て頭が真っ白になった。通信手段もなく、しばらく呆然としていた。避難した人の悲鳴を聞いて、カメラも使えなかった。何ができるか考えて、一夜を明かす人の手伝いをしようとした。保健センターで入院患者の手伝いをした。ここへ重症患者を運んだ。高齢の患者でいっぱいだった。ベットのまま運ばれてきた。次にセンターから使えるものを運んだ。検尿コップには茶を入れた。ストーブや灯油の運び出しを手伝った。職員が1人休みだったので、安否確認をした。真っ暗で家に帰れず、ここで一夜を明かした。余震がひどくて眠れず、服のまま座布団1枚でここにいた。高齢のおばあさんと娘さんが取り残されているのがわかり、3人で救出に行った。ぶら下がっている電線が怖かった。屋根までたどり着き、声をかけて励まし、川になった道路まで腰まで水につかりながら降り、側溝を手探りで測りながら、おばあさんをおんぶして、道を渡ってきた。ガソリン、ガス、灯油が混じった臭いがした。プロパンが漏れてシューシューという音がして、引火しないか怖かった。娘さんは元気だったので1人で歩かせた。おばあさんを無理矢理引っ張り上げておんぶして逃げた。転ぶとだめだと思い、ゆっくりと渡った。恐かったが、何とか助

けられた。火事でもあったらだめだった。

翌日帰ったが、妻の実家が田老なので探したが見つからなかった。グリーンピアや実家、北高の遺体安置所まで行った。3日過ぎるとだめだと思っていたので、生存の気持ちをあきらめながら安置所に通った。朝から夕方まで探しては帰る日々だった。田老の町にはあちこち遺体があった。道路端にも遺体があった。防潮堤にも遺体があったが、見せてもらえなかった。3か月の節目に義理の母と甥の死亡確認のはんこをついたが、自分の意思で届けを出すのはつらかった。

自衛隊、警察のお世話になった。ものすごく助かり頭が下がった。様々な捜索をしてもらった。寒い日が続き、粉塵がすごかったが、黙々と作業をしてもらい、その姿勢がすごかった。土日は身内捜しをやっていた。

1か月後くらいに実家に行った。田老を優先して家のことは何もできなかった。実家の兄と弟は無事だった。実家でも自分のことを心配してくれていた。

郵便局の再開

郵便局の財産をどうするのか動き回った。郵便局を再開するためにどうしたら良いかばかり考えていた。うれしかったのは、田老地区の人がいつ郵便局が再開するのか聞いてくれたことだった。２０１１年の10月5日に今の場所で再開できた。半年ぶりだった。行方不明者の情報は3か月と知っていたので、3か月で再開したかったが、無理だった。局員には通勤可能な場所から通ってもらった。

今感じるのは、普段の生活がどれだけありがたいかと言うこと。水、食べ物、石油、暖かい生活を今感じることができる。父は田老に住んでいたが、今は仮設にいる。避難所で父がどうしているのか見ながら仕事をしていた。配給の時、腰の曲がった人たちが並んで食べるものを待つ姿を見るのはつらかった。

今思うのは、この仕事をさせてもらっているのは、地域の人のおかげだと言うこと。震災でこのことに気づかせてもらった。郵便局が民間会社になり、宮古市の配慮で市の施設に入れてもらえたのはありがたかった。仮設では用が足りず、ここまで足を運んでもらえるのもありがたい。こういうことを職員に伝えることで、彼らも良い仕事ができるのだと思う。震災後はお客様の数が半分に減った。お客様はこちらが言ったことを覚えてくれているので気をつける。

郵便局の仕事は半年後に再開するまで日の出郵便局など他の支局でやってもらっていた。工事などが伴うので、1支局のみの問題ではなかったのだと思う。本社へ行くと決裁の印鑑を押す所が1頁の半分くらいある。会社が分かれたことで手間取った。5月下旬には内諾を得たが、再開には至らなかった。田老の人たちにいつ再開するのか、聞かれるたびに肩身が狭かった。所長にも「ここを貸すと言ったのだから早く再開しろ」とせかされた。

震災前は郵便局、信金、漁協と金融機関が一緒だったが、黒字の局で稼げるのでありがたかった。再開で難航したのはＡＴＭだった。外に設置するには津波地区としての縛りが多かった。土日にも使えるようにしたかった。10月の再開の際にはＡＴＭの設置も間にあった。組織が大きいので小回りはきかないが、職場がない間も解雇されずに働けたのはありがたかった。再開まで毎日あちこちに動いていた。ＡＴＭの移動郵便車で山田や大槌まで行っていた。自分のやるべき事務処理は他局でやってくれるので、職員が帰った後、10持頃から2、3時頃までかかってパソコンで処理をした。ここを借りられたのも今までの財産だと思う。

将来の郵便局の場所は未定のままだ。住民は高台に移転の予定になっている。道路は40㍍内側に入って嵩上げされるという。街の中心にいるべきか、集合住宅の一角にするべきか、選択を誤りたくない。6割の人が満足できる場所に決めたい。お金を下ろして使える場所がなく、住民の数も減ってきている。地域や商店街の皆さんと一体でいたいと思う。街が変わる姿を見たかったが、来月に転勤が決まっているので仕方がない。その後の姿を見に来たい。

震災のマニュアルは機能しなかった。ここは回線がつながらず、指

示を仰げないので、自分で判断せざるを得なかった。チリ津波の際は万一の場合を考え、濡れて困るものは机の上に、重要なものは車の中に入れた。きりがないのでどこかで線引きをしなくてはいけない。その際は命を守ることを最優先にする。下手に指示を仰ぐと後手になる。財産よりも命が大切だとつくづく思った。悔いを残さずに生きてゆきたい。

5　仮設での暮らし

山本佳子さん（元は荒谷、支援員）に2012年8月18日に話を伺った。

仮設暮らしをしている。家は診療所の前だった。当日は漁協勤めだったので、加工場にいた。堤防の海側での作業中で、休憩のすぐ前だったと思う。窓がガタガタ揺れて「あ、地震だ」と言って、皆で外に出た。工場長から「堤防の外へ出ろ」という指示があった。5分くらいそこにいてもずっと揺れていたので、自転車を置いて走って家に戻った。大事な物を2階に取りに行き、通帳、印鑑、携帯を持ち、下に降りたが、まだ揺れていたので慌てた。スポーツバックに子供たちのウインドブレーカーなどを入れ、飴、パンなどの食料も入れて、外に出た。

それでもすぐに逃げず、隣の人と話をしていたら、川戸屋さんの方向から白い煙が上がり、「火事じゃないの」と言っていたら、黒い煙が見え、赤いトタン屋根の流れるのが見えた。それから「津波だ」と言って熊野神社に逃げた。隣の家のじいちゃんもそこで話をしていた。診療所の方から「津波が来た」と聞こえ、ローソンの後ろ側の堤防から津波が来た。ばあちゃんは熊野神社の手すりにつかまり、膝が濡れたくらいで助かった。じいちゃんは助からなかった。

神社の階段の途中に車いすの人がいて避難路をふさぎ、Kさんのおじいさんはそこを通れず、遠回りをしていて逃げられなかった。山の方で火事になり、ロープを伝って下に降り、鉄路に出て、寺と小学校の方向にそれぞれ逃げた。とても寒かった。中学生は途中で助かったのがわかった。先生方も寒さ除けにと学校の暗幕などを外してくれた。山の方の人がおにぎりをもってきてくれて、1個を3人で分けた。次の日は小さい子と年よりに先に分けた。夫の弟が迎えに来て、お父さんと会えて、ふれあい荘に逃げた。

おじいさんはどこかで誰かが引っ張ってくれていて助かってほしいと願っていたが、消防署近くで見つかった。おじいさんは私たちが逃げるのを見ながら流されたと思うと、胸が痛い。それ以降はおじいさんを探しに、ふれあい荘から家まで毎日歩いた。

今は仕事も見つかり、忙しくしていて忘れているが、お風呂に入っているときなど、あの時こうしたら良かったのではとついつい思ってしまう。姑とも一緒に住んでいるが、彼女は自分の夫と妹を亡くしているので、大変だと思う。しばらくは外に出なかった。避難所にいれば知り合いがいたが、グリーンピアに移ってからは部屋をもらえたが、部屋から出なかったので、心配した。散歩とか、何かあるときは出ようと誘ったが、出なくなった。

逃げるときは長靴だなと思った。実家の親を探しに行くにも瓦礫で大変だった。実家は田老の大平地区にあった。母は仕事で山田に行っていた。父はタクシーの運転手をしていて、連絡が付かなかった。父は青砂里で人を降ろし、本社に戻ろうと考えたが、三王閣の方向にハンドルを切った。津波が岩にぶつかり、目の前に波しぶきが上がり、前方をふさいだ。もうだめだと思ったという。後ろに消防車を見たがこれはだめだった。三王閣の工事現場で1泊してグリーンピアに行ったという。会えたのは1週間後だった。

自分がこんな津波を体験するとは思ってもいなかった。今回の地震が来たとき船酔いのような感じで、津波が来るのかもしれないと思った。あんなに大きな地震ははじめてだった。おじいさんたちからは家の所までは津波は来ないと聞いていた。おばあちゃんの妹は熊野神社まで逃げたが、トイレに行くと自宅に戻り、流された。一度逃げても忘れ物などを取りに行って命を落とした人が何人もいた。1人になるとついつい思い出してしまう。おばあちゃんたちは外に出ていたが、私がもっと早く家に帰っていれば助かったのではないかなどと思ってしまう。

仕事場の工場長は皆に逃げろと言ってくれたが、自分は助からなかった。まだ見つかっていない。

夫は宮古でタクシー運転手をしている。鍬ヶ崎の本社からタクシーを移動させていた。パークホテルまで行った。途中下るときに津波が目の前まで来て、あわててバックで戻って逃げられた。その後自家用車で樫内まで来たが走れず、車中で夜明けを待ち、防潮堤を歩き、自宅を見に行ったという。その後、小学校の体育館で再会した。お互い心のどこかでだめかもと思いながら涙の再会だった。

山本祐子さん（昭和49年生、元は乙部、支援員）に２０１２年８月18日に話を伺った。

夫（光広、昭和34年生）は漁協の従業員（潜水士）で、中間育成センターで仕事をしていたが仕事がなく、出稼ぎに出ている。子供は２人で息子の拓実は中３、娘の怜奈は小３になる。

当日は部品組み立て工場で働いていた。働き始めて５か月目くらいだった。昼食に家に戻り、息子の様子も気になったが学校からの連絡はなく、仕事に戻った。かばんに入っていた子供のゲームを家においた。職場には自転車でも通えるが、車で行った。

工場はプレハブなので、地震が来たときはガタガタ揺れた。若い人は机の下に隠れたが、先輩社員から「外に出るように」言われて、開いた非常口から外に出た。ものすごい音がした。家族に高齢者のいる従業員が津波の音だと言った。工場長の指示で車を移動させた。子供のいる従業員が「子供を迎えに行きたい」と言ったが、社長が「だめだ行くな」と言った。

家がトンネルのそばにある従業員と、子供が小学校、中学校に通っている従業員と私の３人で、真っ暗な三陸鉄道のトンネルを携帯を握りしめて歩いた。トンネルを出ると田老は瓦礫と化していた。小学校までたどり着き、子供を探した。ちょうど下校時刻なので娘はだめかもしれないと不安を抱えながら、子供たちが避難しているところへ行った。娘を探せずにいると、娘の方が私を見つけてくれた。娘の手を握り、連れて帰ることを先生に伝え、息子がいる中学校へ線路を歩いた。墓地に登ると息子たちがいたが、中学校では宮古市の指導で返さないと言われた。子供たちは総合事務所の１部屋に集められ、１晩泊まった。小さなおにぎりを２人で分けるように言われ、娘は食べなかった。「もったいなくて食べられなかった」と話した。

翌日「帰れるか自宅を確認をするので、娘をお願いします」と息子の担任にお願いし、線路沿いを自宅のある方に歩いた。車にエンジンをかけ、自宅を探した。どこまで行っても自宅がない。戻ろうとしたとき、近所の人から「俺の婆ちゃん知らないか」と声をかけられたがわからないと答えた。火事のあった山に足が不自由な人と２人がいたので、消防の人に３人が山にいることを伝え車に戻った。そこには夫の姿があった。夫は火事のため田老に降りられず、職場（水沢）と田老を往復していた。私の上司に女性陣は無事と聞き、ここに来たのだという。津波のあった日の夜、夫の同僚に聞いても夫のことは不明だった。ただ２時から潜ると聞いていたと言われ、夫はだめかもしれないと思っていた。息子には「２時から潜っているから、だめかもしれない。覚悟をしておいて」と話した。息子は静かにうなずいた。

夫はなぜかその日に限りいつもより早く現場に行った。作業する人たちも「なーに来たら２時って言ってねーで早くやっぺーし」と言って、１時間早く潜っていたため、夫の他、作業員たちも無事だった。地震があったのは、職場に戻ってきて少したったときだった。同僚の女性に「津波が来る。早く上がれ」と叫んだが、なかなか来なかった。水沢の知人に私の「実家に行ってみろ」と言われた。実家は無事だった。私の母は、下摂待で畑作業をしていたときに地震があった。近くの山に登ろうと考えたが、ラクーター（電動）に乗り家に向かった。一瞬の判断が遅ければ津波にのまれていた。孫たちは「ばーちゃんは津波に勝った」と言っていた。

知り合いから「お前の家は先につぶれた」と聞いた。どこを探してもうちの物とわかるものはなかった。折れ曲がった娘の自転車と息子の写真が１枚だけ見つかった。娘を証明する物が何もなかった。夫の

母の形見を流してしまったのが心残りだ。なぜそのときだけ家に置いたのか。家に残ったのは車2台だけだった。「何も無くてもいいんだ。子供たちが無事だっただけでも良いと思わないと」と思うことにした。

あの日娘は翌日日直のため、スクールバスで帰る友達に代わり、黒板に名前を書くために残っていた。娘には「地震が来たら、一緒にいる友達と手をつないで高いところに登るんだよ」といつも話していた。他の子は泣いたりしていたが、泣かずに先生の言うとおりに避難したという。どこに逃げるか教えないとだめだと思う。私たちは「高い所に逃げろ」と教えられていた。遠くではなく、近くの高いところ。

娘は高い所へという事は覚えていたが、「階段がないと上れないじゃん」と言っていた。

息子は当日「学校へ行きたくない」と言っていたことは覚えていない。でもいつも一緒の先輩と「今日は最後なのだから、とりあえず学校に行って保健室で休んでいればいい」と言ってあげた。

夫は今宮城県女川にいる。夫から45号線沿いに行けば着くと聞いて、子供たちにせがまれて、6時間かけて瓦礫があるところを走った。この景色を子供たちには見せたくないと夫は言っていた。息子は震災前は調理師になりたいと言っていたが、震災で変わった。行方不明の近所のおばあさんを探したいと、潜水士になる決意をした。種市高校海洋開発科に行くことを希望している。夫は「潜水1本だと挫折すると何もできなくなる」と反対しているが、息子の気持ちを知り応援することにした。

実家が農家なので、「米があったら出してください」と言われ、米を出した。物資がまだ届かない頃、私たちは私の実家に避難し、実家の米でおにぎりを作り、食べ物を避難所にいる知人に届けた。「ガソリンがなくなれば来られない」と言うと、がっかりされた。後で「あのときはありがたかった」とおばあさんに言われた。

他の人に会ったとき「大丈夫」と聞けなかった。行方不明の人がいるかもしれないし、家族に何かあったかもしれないため、相手が話してから話すようにしていた。

加持敏幸さん（昭和38年生）、母の**操さん**（昭和17年生）に2012年8月15日に伺った。

予兆

流される前は田老駅前にいて、3年間続けて元朝詣りの時「大きなのが来る。津波が来る」とカミサマが言っていた。南の方で大津波が来たとき「1つの街が浸水する。田老は10チセン」と言った。カミサマはいつも1年の作柄、海の状況を言うが、昨年は3月までしか言わなかった。

じかに神降ろしをして「おみくじ」をお伝えする。聞くのは母。「田老の沖に白い波が来る。白い波が上に来て、それが帯状になったら逃げろ。」昨年は「早めに高台に逃げろ。10メートルの波が来る。」とか、神上げのとき最後に「30メートル」と言った。それで高台に引っ越したいと思っていたが、客が多く混んでいて新しい家を探す余裕がなかった。新しい客が来たとき、水柱の上に立っている姿を見たので、「揺れが来たらまず逃げろ」と話した。

3月11日とその後の避難生活

前日に行った初七日の仏降ろしを依頼された客には「大きな波が来るから逃げろ」と言ったので彼らは無事だった。当日は11時と3時の予約があった。11時の客は終わってすぐ職場に戻った。3時の客が来る前に食事をしようとしたとき、第1波が来て、鳥を車に積んだ。当日第1の揺れの後、家の2階に上がると、消防車が行き来していた。荷物をまとめているうちに2度目の地震で外に出ると、大太鼓の音のようなものが聞こえ、空が曇っていた。泥水が降ってきた。奥尻の地震を思い出し、2階に上がって物を持ち出そうとしたとき、3度目の地震は縦揺れだった。戸を押して外に出ることはできたが、肝心の資格書などは持ち出せなかった。その後すぐに樫内に逃げた。

逃げる途中で霊視をすると「家の柱を15、6人の人がどこかに移動している姿が見えた。そして家が飛んで、どこかに着水して、泥水が遡上した」様子が見えた。1階は津波でやられ、2階は衝撃波でやら

れたが、荷物はぬれていなかった。水が引いた後、テレビ局が中継をやっていた。霊視した15人は飛んでいった家の下にいた。すぐに助けていれば生きていたはずだ。

家の2階は無事だったので誰かがすぐに教えてほしかった。祭壇などは5千万円もした物だったが、後の祭りだった。すべての物が散乱していて、外に出されていた。目の前で私の荷物を運び出している人がいた。1日5往復して箪笥を3棹ずつ運ぶ軽トラを使う、津波泥棒だった。現金、宝石、家財道具、布団という順に持ち出された。

津波の後、水の道ができるとまた必ずそこから崩れる。どんな丈夫な物でも破砕される。我々人間も自然の一部。これは先人の知恵を無視した人災だ。自然の力を逃がす工夫が必要だった。

樫内に逃げた人は60、70人いた。震災後物がなくて、買いものに宮古に通ったが、1時間2時間待ちだった。店の中には入れず、ほしい物を紙に書いて、その物を店員が探し出してきて、それを現金で支払った。翌日は叔父のために薬王堂に行ったが、3時間待ちだった。西町は停電しておらず、貯金を下ろすことができた。ベルフ近辺は水道も出ていた。山口の田ノ神湯も12、13日にはやっていた。薪を燃料に使っていたので風呂を沸かせたという。そのときまた震度5の揺れがあり、5㍍の津波が来るという予報があった。

これまでの生き様

私は元は北海道礼文島の礼文神社の宮司だった。先に御嶽教の資格を取り、次に東京で神職の資格を取った。御嶽教は函館で資格を出しており、本部は奈良にある。神道の着る物は白衣、狩衣、烏帽子だが、御嶽教では白衣と袴。旭川神社の宮司からもらった手紙をもっている。旭川には離宮跡がある。

この世界に入る前の20歳の頃、家を新築した。家の前にイタコさんのような人がいて、妹を貸してくれと言った。家では歴代次女に霊媒体質の者が出る。3代は出ている。男に出るのは500年ぶりだ。小さい頃から仏事があり、身内が9、10人くらい亡くなっていて、3歳頃から坊さんのまねごとをしていた。

始めは大本教に行き、祓いをして、その人の因縁を取るという方法をやっていた。先生が私らに質問をして、私らが答えると、何年も取れなかった因縁が取れたりした。先生の所はオシラ様を祭っていたが、持ち主には反応しない。月に1回くらい大勢の人（約100人くらい）が集まってオシラ遊ばせをやる。津軽では朱印を押した衣を着て死に装束にする。ここでは100人中5、6人がオシラ様をもってくる。私と妹がオシラ様をもって手踊りをして、お告げをする。オシラ様は「行」をすると位が高くなり、人を救う力がある。その家に不具合があると、オシラ様はその家を飛び出してしまうと言う。そのために月に1回お祭りをする。先生の仕事の邪魔をするつもりはなかったが、八つ当たりをされたりしたので、ここを出た。

護り神

私には御不動さんの護りがかかっている。火の災い、水の災い、刀の災い、ケモノの災い、神の災いなど、子供の頃からすべての災いを経験した。神の災いでは頭にけがをした。母の夫は鉄砲をいくつも持っていたので、ケモノの災いが出た。となりのイタコさんは行をせずポット出た。「特別なことをしなくてはならない人は罪深い人」「生活そのものが行。生きている間の行こそが世界」とカミサマが言う。2歳の頃から見せられた。すぐ下の妹を黒い男の人が抱えてぐるぐる回っていたのが見えた。この妹は1日しか生きられず亡くなった。そこで大人並みの葬式をやったら出なくなった。自分の言ったことがすぐに実現してしまう。15歳の頃はゲーム感覚だった。専門学校で運勢占いをするとすべて当たった。試験後に先生の採点をしている姿が見えた。誰に言っても信じてもらえず、黙っていた。

大本教の教会にいる間、行をしていた。そこで夕食にシジミ汁が出て、そこから石が出てきたので、先生に聞くと、「御不動さん」と言われた。カミサマの行の最中に魂が入っていると独特の香りがする。降りてくるカミサマにより香りが違う。天照大神は伽羅の香りが部屋中に漂い、

部屋中が明るくなる。魂が本当に入っていないと何も無い。

函館の東照宮に勤めていた頃、神社の鐘に正月に着る装束の若い人の姿が出てきたことがあり、これはカミサマだった。お祭りの直前に3日間参籠をして、本祭りの夜中の12時頃、きれいに磨いた床に、奥の院の扉が開くギーという音がして、外から拍手一つパーンと音がした。カミがいるという印だった。

礼文では真冬でも神社の中は30度の暑さになる。12月31日の夜中の12時に風が止んでカミサマが降りてくる。

盛岡、青森、秋田、千葉、東京、ニュージーランド、カナダのケベックから客が来る。行方不明の人を見つける。霊視をすると見える。水死した人も見つけた。なあどの下に沈んでいる人も見つけた。3か月前に霊視したが警察は証拠がないと取り合ってくれなかったが、外れてほしいことばかりが当たる。

不治の病は人の中にある悪相が原因だ。邪気が凝り固まると大病になる。見えて、相手が何を言っているのか、どうしたいのか、どうやって旅立たせてあげれば良いかを伝えてあげられないのは本物ではない。事故の現場ではたいてい地面の神からの解放をしなければ、事故は多発する。

國學院で神道の資格を取ったのは19歳。御嶽教へは21歳の頃に入った。本家は平家の時秀の五番目の子の系統。白川法皇から大納言の位をもらった。能登の時国家が本家の叔母の家に当たる。加持は大洲の国司で名代の名主と言われた。１５００年代に加持某が即身仏になっている。石川県能登の福寿寺の曾孫じいさんは宮大工で、北海道大野町の甲谷（かぶとや）という人に神社を建ててほしいと請われ、娘の婿になるように言われ、姓を変えずに結婚をした。北海道の道南の神社の7割は親戚にあたる。私の家の祭壇は神社系のやり方をとっている。

野場多恵子さん（昭和23年生）２０１２年8月19日に話を伺った。

母のこと

母の野場ミヨからは神子で、「千早はとって置いてほしい」と言われた。母の姉の松本タケさんから母の本がどこかで手に入れられないかと言われた。父は平成12年4月に、母ミヨは平成22年4月9日に亡くなった。糖尿病と腎不全で透析をやっていた。1月まですごく元気だった。始めはとろみの付いたご飯きり食べられなかったが、亡くなる前には普通のご飯も食べられるようになったが、突然に亡くなった。千早、袴、白い着物、オダイジ、数珠、御幣、笏など衣装ケースにしまっておいたが、すべて流された。

3月11日

私はローソンの前で床屋をやっていた。3月11日は店に客がいて、ちょうど終えた所だった。この客は83歳になる元消防士さんだったので、心強かった。次の予約の人もいたので、始めは逃げなかった。地震では上から落ちる物もなかった。道路に車が渋滞していて、交通整理を始めたが、そのうち誰もいなくなった。ラジオをつけると津波は3㍍と言うことだったので、ここまでは来ないと思った。店に位牌が置いてあったので、仏壇を見ると花瓶が倒れていた。犬と猫を飼っていたので、猫をこたつに入れ、犬はサークルの中に入っていたので、鍵をかけてゆっくりと歩いていた。Mさんと熊野神社に上がろうかと話していた。隣のSさんは家に戻っていった。階段を上ってみると、海水が堤防を越えた所だった。それで熊野神社まで上がり、下を見ると津波は来ていなくて、のんびり座っていた。

しばらくすると皆がワーっと言うので家の方向を見ると、霧しか見えなかった。よく見た人は渦が巻いていたという。「自分の家が流れるのが見えた」と言っていた。近くにはWさん、Oさん、Sさんのお母さん、観光ホテルの人たちがいた。しばらくするといとこが上がってきて、叔父（父の兄）が流されたと言った。そのうち上を見ると煙が出ていた。長床にいた人たちに「出てきて」と言って、山の反対側にロープを伝って降りた。身体の不自由な人は消防の人がおぶって逃げた。Sさんは戻らなければ良かった。息子は堤防にいて海を見ていたが、全速力で熊野神社の北側の方向に逃げた。Mさんは亡くなったという。

トンネルを越えて小学校に逃げた。体育館に入ると大勢がいた。何も無かったので、親戚の人が友人の家から布団を持ち込んで来てくれて、こたつのように入った。

避難生活

黒田先生の指示で、病気や重症の人は腕に赤いテープを巻いた。軽症の人は黄色、健康な人は何もつけない。先生は総合事務所にいた。赤と黄色のテープをつけた人は図書館に集められた。そこには看護師が常駐していた。民生委員もいた。食事はおにぎりを半分ずつだったり、1個ずつだったりした。小学校には1週間くらいいた。4日目に叔母の娘が来たので、叔母を連れて行ってもらった。

別の母方のいとこが寺にいたので、そちらに移った。寺での食事は最初は半分ずつだったりしたが、日がたつにつれて少しずつ種類も増えていった。家が心配だったので、自分の家を探しに行った。毎日半日くらいは家の近くを歩いた。店を建ててくれた大工さんが、「これ野場さんの家だよ」と教えてくれたのは、熊野神社の下の消防署の近くだった。通っても気がつかなかったが、物が転々と流れていた。家の屋根だけ残っていた。海からまっすぐ流されたのなら山に当たるはずだが、直角に曲がって消防署まで来た。長内川を遡って逆流したという人もいる。屋根の下には箪笥、鍋、畳があった。自衛隊の人が家の中に入って中の物を出してくれたが、びしょ濡れで、「もう良いです、捨ててください」と言った。母の一周忌が近かったので、準備しておいたものが流れてしまった。屋根を上げてもらっている間に、そこから遺体が出てきて、ブルーシートで覆い「今日はここまで」と言われた。翌日ブルドーザーで上げてもらったら、また奥の方から男の人の遺体が出てきたので、また「今日はここまで」となった。

寺には4月1日までいた。寺ではストーブが2個あり、寒くなかった。皆で手分けをして当番を決めて掃除などをした。「誰かが亡くなりました。見つかりました。火葬です」と聞くと、皆で行って手を合わせていた。遺骨を入れる物がなく、風呂敷とかビニール袋などに入れていた。和尚さんも泣いてしまった。その間病気で亡くなる人もいた。ここは火葬場が残ったが、ここにも避難していた人たちがいた。

4月1日からアリーナに移った。知り合いがいたので移っていった。この間のことはよく覚えていない。

津波が来る夢を見た。夢でおばあさんが出てきて、ズシンと地震が来て、それでおばあさんを背負って三王閣に登ると津波が来た。また東京から友人が遊びに来ていて、高台から家の方向を見ると、真っ暗だった。いとこのMさんの家の方に行くと、松アカシにズラーと火が点いていた。友達がまた訪ねてきて、「お寺に泊まっているから訪ねてきてね」と言われ、寺に行くと「誰も泊まっていません」と言われた。おばあさんを背負って3階の高い所に行き、下を見下ろしていた。

これらの夢は、おばあさんが高台に行きなさいと言っているのだと思い、新しい家は乙部の高台にしたいと、アンケートにも書いた。この夢は津波の半年前くらいから見ていたが、まさか本当に津波が来るとは思わなかった。

仮設には6月15日に移り、そのまま荷物を運んで休んだ。寺では着の身着のままだったので、Kさんからセーターをもらった。寺から出るとき、いろいろな支援物資をもらった。今日は靴下2枚、毛布などと言ってもらった。アリーナに来てからは掛け布団をもらった。自衛隊からは毛布が配られた。

6　街づくり協議会

2012年8月17日に田老の集会所で街づくり協議会が開かれ、傍聴した。これは定期的に開催されており、この日は協議会からは会長の小向源一郎さん、副会長の小林昭栄さん（田老漁協組合長）と前川邦夫さん（㈲田老ガス水道設備工業社長）、高台部会の林本卓夫さん、商業部会の田中和七さん、また浜小屋部会や防災部会から7人が参加していた。また学童指導員、前宮古広域消防次長、グリーンピアで被災当日から救急要請等の責任者だった金沢順二さん（昭和22年生）なども列席していた。

商業部会

田中和七さんの話である。新しい街ができたとき、商店が1か所に集まれる「街の駅」構想を作っている。ばらばらになると力がない。高台移転になった場合、商店も移ってほしいと市から言われた。しかし希望者はそれほど多くない。前の商店街を盛り土してそこに住みたいという人が多い。高台だと商売が成り立たない。国道沿いの不特定多数の客を相手にしたい。そこで店舗数などの数字を出している。盛り土にすると3年くらい寝かせておく必要がある。市では役場前を防災拠点にしたいと考えているようだが、それで認可が下りるか心配している。構想の規模や住人が近くにいないと商売は成り立たないので、復興住宅を近くに作ってほしいと合わせて要望している。

津波を見た人、とくに女性は元の場所に戻りたくないという。近くに住みたい人の数はまだ未定だ。旧来の場所なのか、盛り土をした場所になるのか、検討中である。一番の関心事は地価の価格がどうなるかだ。これが唯一残った財産なので、早く知らせてもらえれば、計画が立てやすい。新しく家を建てる人は大事業なので、目安がほしい。

個別のアンケート調査はこれから。前の調査とこれまでの情報が入った後で、皆がどう考えているかが興味がある。アンケートはこれまでに2回やった。防災拠点は国が作ると思うので、そこが地域の中心になりそうだ。

市が主催した初期の街作り検討会では話題にならなかったが、自分たちはどこに住み、商店街はどこになると言ったソフト面が知りたかったので、協議会を立ち上げた。

２０１１年11月21日に自分たちの構想図を考えた。２０１２年5月26日に第1回協議会を立ち上げた。その際、私は防災を中心に考えていたが、街ができないとそれができない。２０１６年には候補地を選定し、２０１７年設計図作成の予定だった。これでは遅すぎるので街づくり検討会を開始した。

東南海地震の安全計画の作業が現在進行中なので、参考にするために月に1回東京に行っている。